

国立国会図書館 調査及び立法考査局

Research and Legislative Reference Bureau
National Diet Library

論題 Title	地べたからみた若手研究者問題四半世紀—何が変わり何が 変わらないのか—
他言語論題 Title in other language	Training Junior Researchers: What Problems Must Be Addressed in the 21st Century?
著者 / 所属 Author(s)	榎木 英介 (ENOKI Eisuke) / 医師、一般社団法人科学・政 策と社会研究室代表
書名 Title of Book	「科学技術立国」を支えるこれからの研究者育成: 科学技術 に関する調査プロジェクト報告書 (Fostering Future Researchers in Support of the Science-and-Technology-Oriented- Nation Concept)
シリーズ Series	調査資料 2019-4 (Research Materials 2019-4)
編集 Editor	国立国会図書館 調査及び立法考査局
発行 Publisher	国立国会図書館
刊行日 Issue Date	2020-02-28
ページ Pages	—
ISBN	978-4-87582-854-9
本文の言語 Language	日本語 (Japanese)
摘要 Abstract	—

* この記事は、調査及び立法考査局内において、国政審議に係る有用性、記述の中立性、客観性及び正確性、論旨の明晰（めいせき）性等の観点からの審査を経たものです。

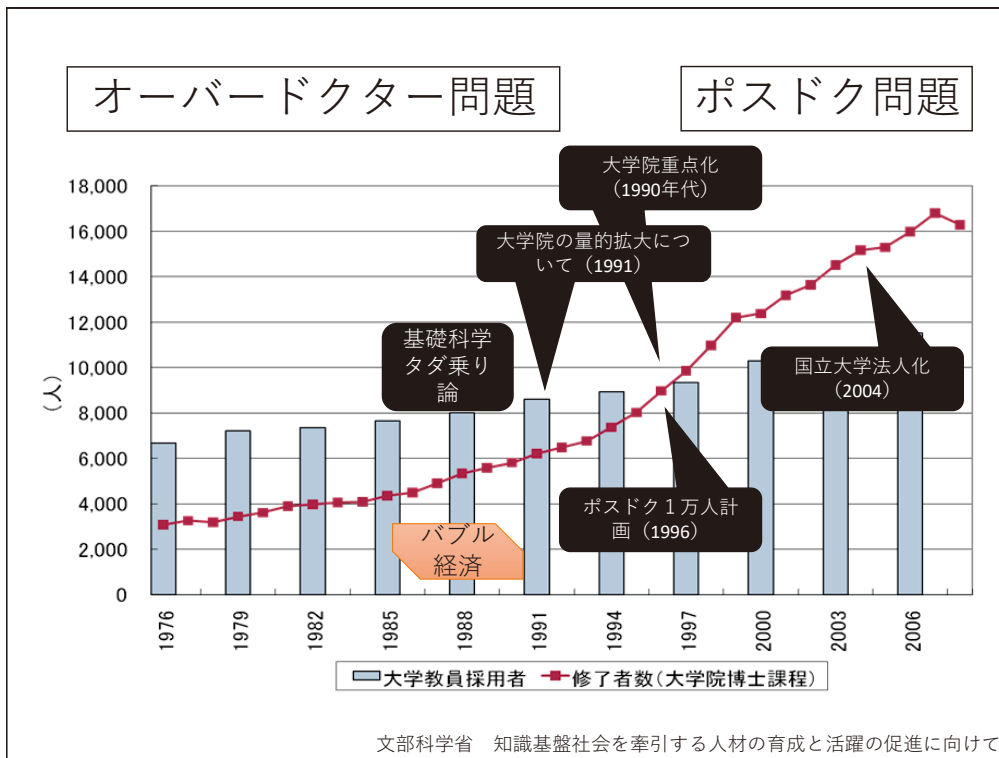
* 本文中の意見にわたる部分は、筆者の個人的見解です。



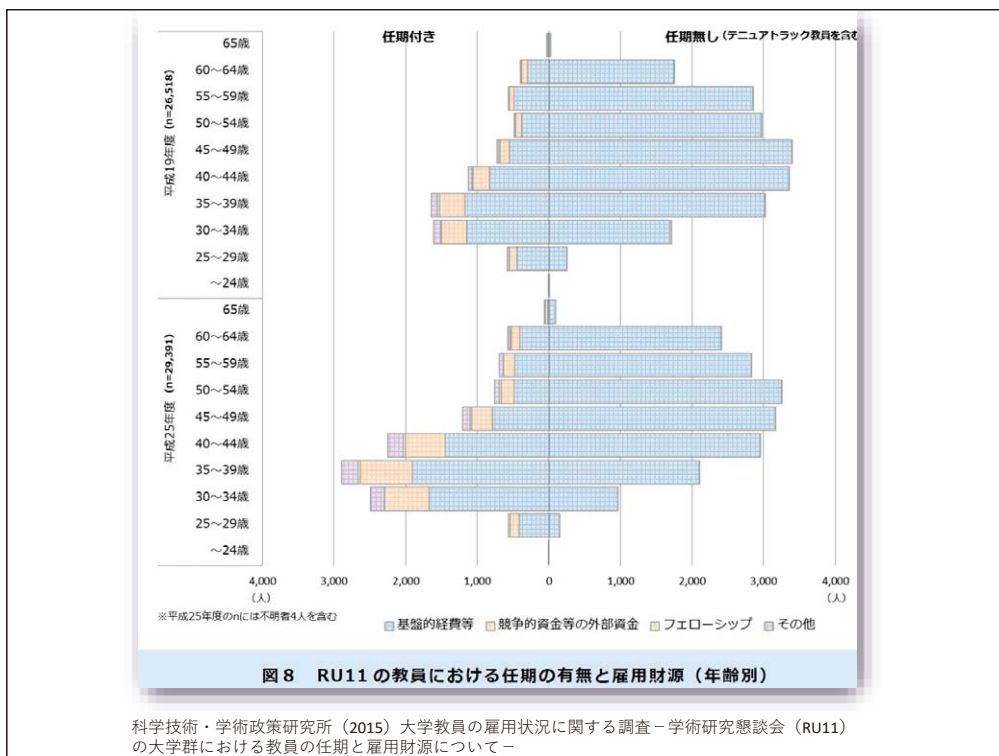
スライド 1



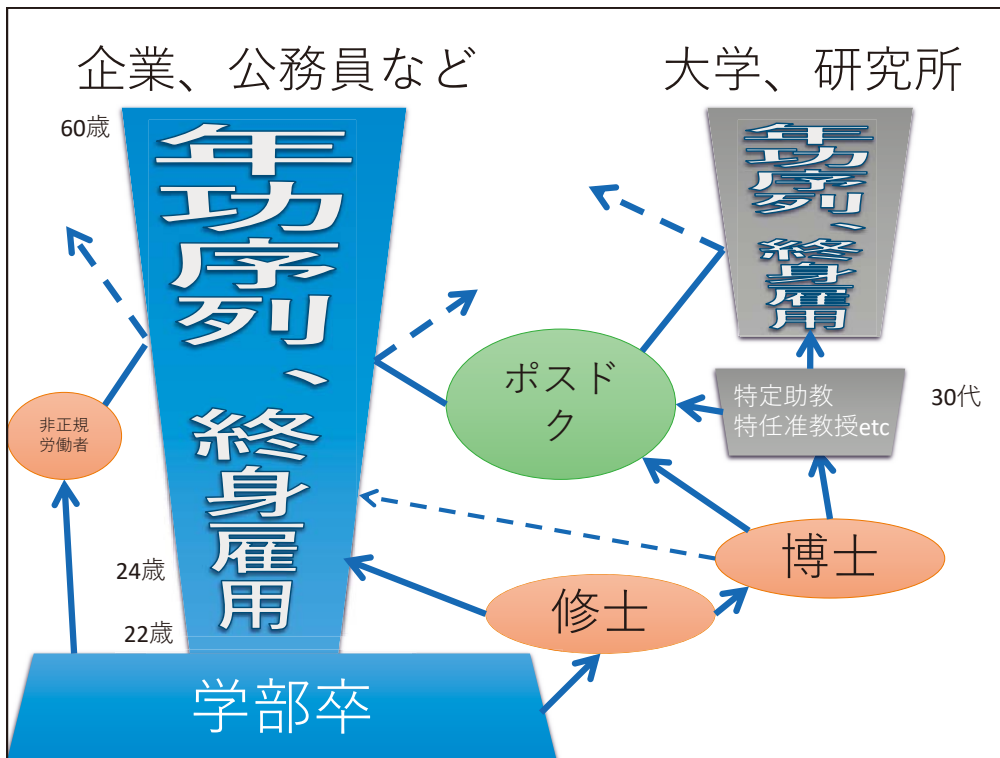
スライド 2



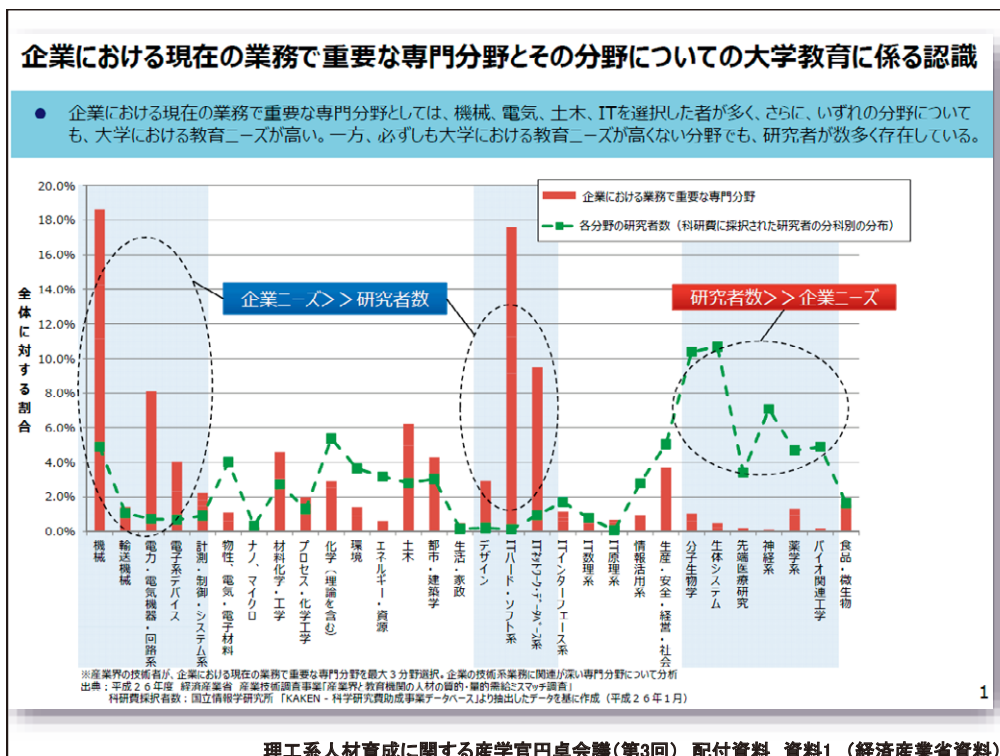
スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6

ピペド研究室

紹介状 学位 研究費
実験場所、器具 人事権

もっと働け！
結果出せ！
雇い止めするぞ！

学位欲しいし...

推薦状必要だし...

就職先ないし...

スライド7

The collage features several key elements:

- Top Left:** A video frame showing a man in a white shirt speaking, with a clock showing 8:37.
- Top Center:** A book cover titled "失敗しない大学院進学ガイド" (A Guide to Graduate School Admission Without Failure) by 根木 英介 (Hideo Neki).
- Top Right:** A newspaper clipping with the headline "博士 時代 漂流" (PhD Era Drift) and a sub-headline "博士 時代 漂流" (PhD Era Drift).
- Middle Right:** A newspaper clipping titled "NPO法人「サイエンス・コミュニケーション」代表 根木 英介さん(32)" (Mr. Hideo Neki, 32, Representative of NPO Science Communication).
- Bottom Left:** A newspaper clipping titled "科学政策への注文 若手がつかされる科学のために" (Comments on Science Policy: For Science to be Used by Young People).
- Bottom Center:** A newspaper clipping titled "Japan's funding cuts hit the future of science" with a sub-headline "Could rate of faculty be the key to ending that?".
- Bottom Right:** A newspaper clipping titled "博士 時代 漂流" (PhD Era Drift) with a sub-headline "博士 時代 漂流" (PhD Era Drift).

スライド8




スライド 9

統合イノベーション戦略
2019


- 「研究力強化・若手研究者支援総合パッケージ」（仮称）を策定
 - **若手**研究者のポスト及び研究資金への重点化、テニユアの拡大（卓越研究員事業の見直しを含む）、任期の長期化
 - 博士進学者、海外への留学生の増加のための目標設定、方策（博士の意義、多様な財源による博士・**若手**研究者への経済的支援を含む）

スライド 10

経済財政 運営と改 革の基本 方針 2019

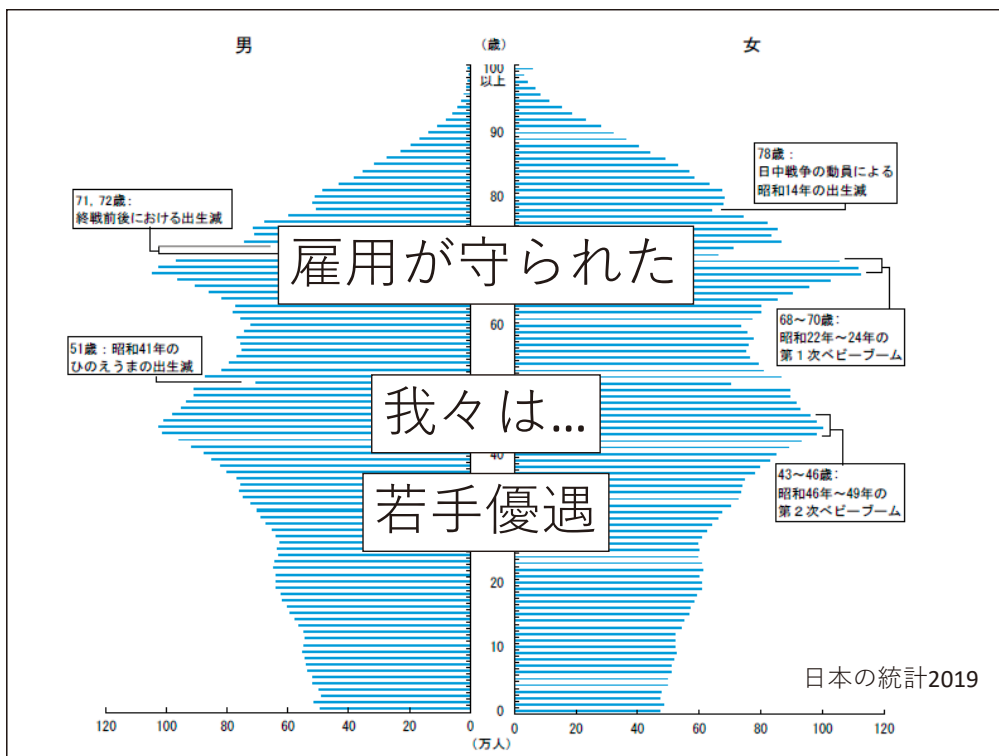


メンバーシップ型からジョブ
型の雇用形態



就職氷河期世代支援プログラム

スライド 11



スライド 12



スライド 13



スライド 14

あなたは何を
しますか

スライド 15

パネリスト報告 1

地べたからみた若手研究者問題四半世紀 —何が変わり何が変わらないのか—

医師、一般社団法人科学・政策と社会研究室代表
榎木 英介

本日はお暑い中、お集まりいただきありがとうございます。

私の本業は医者ですが、いきなり医者を目指したわけではなく、紆余曲折がありました。このシンポジウムのとっかかりとして、私自身の体験を含めて、地べたと言いますか若手研究者の育成現場で何が起きているのかといったお話をさせていただきます。

スライド 2 は、1991 年、私が大学に入学したときの写真です。この時代は、みんなグレーのスーツを着るわけではなくバラバラですね。牧歌的な時代だと思いますが、この 1991 年は、まだ景気のいい時代で、我々も結構、希望を持っていた感じがあります。写真には同級生が 18 人写っているのですが、この中で現在、研究者になっているのは 3 人か 4 人ほどで、あとはいろいろな職業に就いています。私の同世代の人たちがどう生きてきたのかについても、お話ししたいと思います。

スライド 3 は、1976 年から 2006 年までの大学教員採用者数と大学院博士課程修了者数の推移を示したものです。私が大学に入学した 1991 年の秋、「大学院の量的拡大について」が発表され、大学院の数が増えましたが、そのころバブル経済が崩壊し、景気がだんだん悪くなっていきます。また、大学院重点化ということも言われました。さらに、私が大学院に入るころ「ポストク 1 万人計画」ができ、私の大学院時代、つまり 90 年代後半には、同級生が上の学年に比べて増えたことを体験しています。

その後、2000 年代には国立大学の法人化などいろいろありましたが、その頃になると、大学教員採用者よりも博士課程修了者のほうが明らかに多くなります。こうなると、博士課程修了者は社会に出なければならなくなります。しかし、残念ながら、あまりそういうことを意識した教育を受けた記憶はありません。

1970 年代、80 年代はオーバードクター問題といって、博士課程在学者や修了者が職のないまま大学に滞留するような時代でした。そして 1990 年代以降 2000 年代にかけては、ポストドクターという短期雇用の研究職はあるが、その先がないという時代になりました。

スライド 4 は、平成 19 (2007) 年度と平成 25 (2013) 年度の RU11 (リサーチ・ユニバーシティ 11)⁽¹⁾、つまり研究大学における任期付き研究者と任期なし研究者の年齢別割合を示したものです。若手を中心にだんだんと任期付き雇用の割合が増えてきていて、いわゆるポストドクター問題にとどまらない状況が生じています。つまり、大学教員も短期雇用というか非正規雇用ようになってきているのです。

(1) 「RU11 とは、研究及びこれを通じた高度な人材の育成に重点を置き、世界で激しい学術の競争を続けてきている大学 (Research University) による国立私立の設置形態を超えたコンソーシアム」で、正式名称は「学術研究懇談会」。平成 21(2009) 年 11 月に 9 大学で発足後、翌年 8 月に 2 大学が加入し、11 大学で構成されている。「RU11 とは」RU11 ウェブサイト <<http://www.ru11.jp/about.html>>

「優秀だったら博士課程修了者は企業に雇われるはずだ。雇われないのは無能だから」と、この20年間さんざん言われてきました(スライド5)。そのような部分もなくはないと思いますが、そうじゃないだろうと反論しても、ぜんぜん聞いてくれません。それが悔しい。日本の会社はメンバーシップ型です。新卒一括採用で学部卒、せいぜい修士卒で採ったメンバーを会社内で転々と異動させる。博士課程修了者や既卒者は採用しない。バブルが崩壊した後はメンバーを絞った。採ったとしても非正規雇用。その中に我々世代は放り込まれたわけです。そのため、博士課程、ポスドクを修了して、採用してくれますかと言っても、企業はそう簡単には採用してくれません。年齢制限にひっかかってしまいます。このような状況があって、さんざんお前ら無能だ、お前ら無能だと言われ、そのたびに反論して、嫌になったんです。このような時代があったわけです。

私は、生命科学系、バイオ系の理学部出身でした。経済産業省の「理工系人材育成に関する産官学円卓会議(第3回)配布資料」を見ていただければ分かりますが(スライド6)、企業ニーズと研究者数が多い分野がある一方で、バイオ関連工学や分子生物学などの生命科学分野には企業ニーズがありません。そのため、そもそも企業は採用もしてくれないので、これは大変だということになったわけです。もちろん、企業ニーズが研究者数を上回るITなどの分野もありますが、バイオ系はまさに悲惨な状況になりました。

その悲惨な状況を脱出するために、私は医学部に入り直し、医者になりました。医学部に入ったら、元研究者でした、元ポスドクでした、みたいな人が結構いました。もちろん、こうしたことができるのは経済的にゆとりがあった人で、脱出できなかった人たちもたくさんいます。

脱出できないとどうなったかという、いわゆるピペド研究室(スライド7)がたくさん誕生したのです。そんなことはないと言われますが、実際にいろいろな訴え、悲惨な話を聞いています。実態はパワハラ研究室です。研究者の人事権や研究費、学位とかを一手に教授が握っているため逆らえない。その上、就職先がないから逃げ出せないという状況です。奴隷のような扱いです。そのため、生命科学系が使うマイクロな量を吸い取る器具であるマイクロピペットの奴隷、ピペドだと言われるわけです。これは誇張ではありません。私はいろいろな活動をしなが、さんざん悩み相談を受けてきましたが、悲惨な話をいっぱい聞きました。このような状況を強要された研究生の事例も実際に聞いています。

そのため、私自身は医者になって脱出しましたが、同級生、同世代が悲惨な目にあっているの、新聞にもいろいろ書いてきましたし、本も書きました(スライド8)。科学雑誌『ネイチャー(Nature)』にも書いたことがあります。いろいろやりました。もちろん、口で言っているだけではだめで、博士課程修了者だけでなく大学院生も集めて、今後どうやって生きていくかというミーティングも開いたりしました(スライド9)。総合科学技術会議に呼ばれたこともあります。地域ミーティングみたいなものに出たこともあります。

最近いろいろなことが言われています。「統合イノベーション戦略2019」では、研究力強化・若手研究者支援総合パッケージが策定されています(スライド10)。若手を重点化しましょう、お金を出しましょう、テニユアを拡大しましょう、経済的支援もしましょうと。すごくいいことだと思うのですが、私たちは既に若手ではなくなっていました。40代になっています。40代の人たちのために打ち出されたのが、就職氷河期世代支援プログラムです(スライド11)。また、メンバーシップ型の雇用形態はいかんだろうと言っていたら、ジョブ型の雇用形態も出

てきました。少し希望も見えていますが、どうも梯子を外されちゃった感を感じています。若手を優遇してくれと言っていたら、自分たちが若手でなくなったときに若手が優遇されるようになった。私たち就職氷河期世代は、どうしていくんでしょうねという話です（スライド12）。

そうこうしているうちに、去年から今年にかけて、人文社会系の40代の研究者の自死が相次いで報道されました（スライド13）。実は、私自身、自死した方のことを個人的に聞いたこともあります。こうした事例は、もっともっとあります。九州大学の事例は報道されて大きな話題となりましたが、それは氷山の一角です。死んでいる人がいますよと言っても、なかなか動かないよねという話で、じゃあどうしようということなのです。

25年間みてきましたが、今の学生はさっさと逃げ出していますし、すごく柔軟です。政策も刷新されているようですし、社会状況も変わりました。ただ、変わっていないのが、大学教員の3割ほどの当事者意識です。就職氷河期世代の危機的状況も変わりません（スライド14）。政策がとか大学がとか言っている場合ではないというのが、私の言いたいことです。「あなたは何をしますか」（スライド15）と。

私自身は大学とか政策とかが嫌になったので、在野のことを突き詰めようかなと思っています。逃げているわけでも、捨て鉢になっているわけでもないのですが、皆さんが何かを考えて、何か行動しないと、死んでいく人がどんどん増えていくのではという、非常に強い危機感を抱いております。ということで、私の問題提起とさせていただきます。